

69号に引き続き、今号では、現学芸員内海美佳が明野歴史民俗資料館の歴史を振り返ります。

平成18年12月、まだ大学院在学中に、学生生活を送っていた茨城県より山梨県にやってきました。人としても学芸員としても大変未熟でしたが、たくさんの方々から助けをいただきながら、学芸員として働いて参りました。

農村における民俗とは、農業や農の暦と切っても切り離せないものです。いくら民俗学を学んできたとはいえ、地域の皆さんにとっては当たり前のことが、東京の下町に生まれ育ち、農業とは無縁の生活をしてきた私にとっては馴染みが無く、面食らってしまうこともしばしばでした。そのような時、いつも助けて下さったのが会員や郷土研究部の皆様でした。ご自宅にお招きいただいたり、資料館にご来館いただいってお話を聞かせていただきました(農の恵みである、お米や野菜もどっさりいただきました)。

資料館での仕事の思い出を2つ。

1つ目は、着任1週間後のこと。明野小学校より、6年生の授業で第二次世界大戦について資料を使って話をしてほしい、と依頼がありました。働き始めてから、たったの数日。どのような資料が収蔵庫にあるかも分からない状態で、私に務まるか不安でしたが、解説準備のために千人針に触れていた時、その千人針やそれを所持していた人がぐり抜けてきた歴史を想い、ポロポロと涙がこぼれてきました。そして、資料館の資料ひとつひとつに、誰かが暮らすのために使った歴史があり、それを地域の皆さんに伝えるのが私の役目だと、気を引き締めました。



明野小学校6年生 授業の様子



第14回企画展「食の歳時記」ハンズオン展示



第15回企画展「装いの民俗」内海学芸員案内の様子



第8回企画展「明野・山梨・そして全国の茅葺き」

2つ目は、最初の企画展「明野・山梨・そして全国の茅葺き」です。初めての企画展作りで、何から手をつけていいかも分からず、回りに迷惑をかけながらの開催でしたが、「企画展を観に来ました」という来館者の言葉が本当に嬉しかったことを覚えています。その後も何度も聞くことができたこの言葉は、その度に新鮮に私の耳に響きました。

これら、着任して日が浅い時期に得た経験が、明野での学芸員生活の励み、礎いしずえとなりました。

資料館の隣に小さな畑があり、こども達と一緒に昔ながらの農法で野菜を作ってきました。収穫間近の作物を見て、畑作りを手伝って下さった方が言った「充実」という言葉。それまで、「充実」という言葉が、作物の「実」が「充ちる」ことからきているのだと気付いていませんでした。明野で過ごした4年4ヶ月は、まさに充実した日々でした。



資料館の畑 収穫祭の様子

地域の歴史文化の保全・伝承に貢献できたのか、自信はありませんが、支えて下さった多くの皆さんへの感謝を胸に、明野で学んだことや得た経験を活かして、今後ますます精進したいと思います。ありがとうございました。

内海美佳